勤務していたわたしに協力を依頼してこられた．

事務担当を引き受けたわたしは，前回（第5回水郷）よりも規模が大きくなり，検討事項も多くなると判断し，東京・茨城・千葉在住の数人の会員に準備委員会への参加を呼びかけるとともに，さらに加わる方を推薦していただいた．最終的には，大滝末男・相生啓子・片山舒康・土谷岳令・野原精一・林浩二・原茂樹・山崎史織（敬称略）の8名（他に協力者として齊藤英樹氏）で準備委員会を構成することとなった．これほど大規模な準備会はその後の全国集会にもなかったろう．準備会合も1987年12月，1988年1月・6月・7月と熱心に開き，さらに直前に現場を下見するなど，大変な作業量となった．どうしてこうまで手間と時間をかけたのか，準備委員としておつきあいいただいた方に，今となっては申し訳なく思うほどである．基本的には準備会にまかされているとはいえ，10周年記念大会ということでもあり，研究会事務局の角野さんとも連絡を密にしていた．

研究会の全国集会では，エクスカーションへの期待は小さくないように思う．そのエクスカーションが設定されていなかったにもかかわらず，会員の多い関東での開催ということもあり，宮城県から鹿児島県まで全国から61名の参加があった．

いつもの半日では討論時間が足りないので，今回は2日にわたってじっくり議論しようと，最終的にエクスカーションは行わないことになった．研究発表は「日本の水草相の変遷と現状」を中心テーマに募集し，一日目の午後に8題，二日目の午前にそれぞれやや長い発表で3題の計11題となった．研究発表に十分な時間を割り当てたつもりだったが，討論時間はやはり不足気味だった．とはいえこの時の発表を中心として10周年記念号（33・34合併号）がきわめて充実した内容で1988年12月に刊行されたことは，喜ばしいことだった．

なお植物公園主催，研究会協賛の水生植物展が7月16日～8月14日の日程で開催され，睡蓮鉢での水草の展示，室内での写真パネル展示などに，大滝会長はじめ会員有志が協力した．

特に節約に努めたわけではないが，参加費から経費を差し引いて1万円余の残額が出た．これに集会への寄付（この回は特別で18万円もあった）をあわせて，事務局に運営資金としてゆだねた．現在とは違ってこのころは会は財政的に余裕がなく，事務局の角野さんからずいぶん喜ばれたことを記憶している．

研究会の10周年記念事業として国内の水草フロラ調査も検討されたが，この翌年（1989年）には日本初のレッドデータブック「我が国における保護上重要な植物種の現状」が（財）日本自然保護協会・（財）世界自然保護基金日本委員会から発刊され，オニバスがその表紙を飾るとともに，水生・湿性植物の国内での減少傾向がはっきりと示された．そういう意味でも節目の年だったと言えるかもしれない．

暑かった夏の思い出　―第11回全国集会―

國　井　秀　伸（島根大学汽水域研究センター）

手元には，参加者を写した未使用の葉書が2枚だけ残されていた．平成元年のかもめーるである．10年以上も前の集会であるにもかかわらず，この写真に写されている参加者の顔と晴れ渡った青空を見て，当日の様子がだんだんと蘇ってきた．

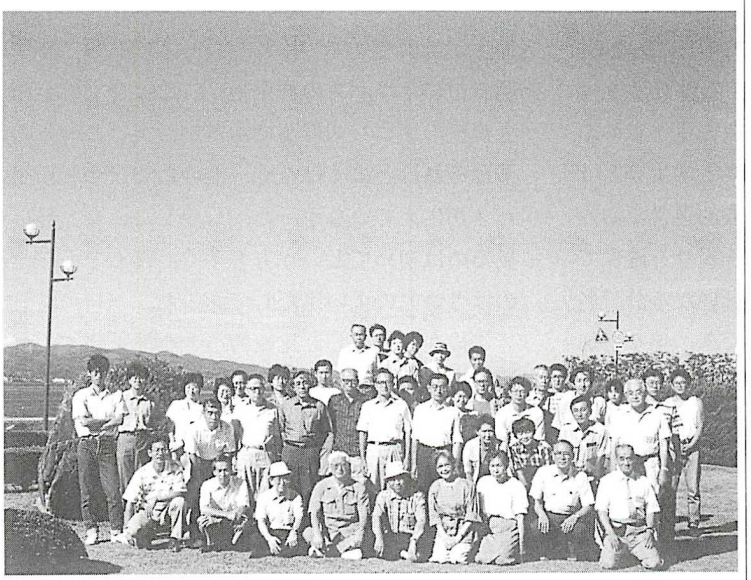
発表，宿泊，懇親会は宍道湖畔の「ホテルなに

わ別館」で行った．畳の部屋にスクリーンを持ち込み，スライド発表を行ったように記憶している．集会前日に大滝会長とホテルのマネージャーに挨拶に伺い，そのせいかどうか，格安の研究会価格で通常の待遇を受けたようだ．集会当日はもちろんのこと，準備段階でも当時の３人の卒研生，山田賢治君，幸田道洋君そして井澤真樹子さんの世話になった（みんな写真右後方に写っている）．缶ジュースを前日に買い出しし，低温室に保存しておいたことを思い出す．

私が島根大学に赴任したのは1983（昭和58）年の３月だが，その翌年から宍道湖・中海周辺のため池の水草相と水質の調査を始めていたので，現地見学会で紹介したい場所はすぐに決めることができた．水草の組成が，場所によって違うことを実感してもらおうと考え，見学会では，宍道湖を一周するように，まず湖北のため池（円木池など）を訪れ，次に斐伊川河口，そして最後にやや標高の高い宍道湖南側の忌部（いんべ）休養林にある池を訪れることとした．湖北のため池群では平野部の水草を代表するヒシやクロモ，マツモ，イヌタヌキモなど，高台の湖南の池ではフトヒルムシロ，ヒツジグサ，ジュンサイなど，そして斐伊川河口の小河川ではササバモ，オオカナダモ，ホソバミズヒキモなどが見られたと思う．斐伊川河口では，これははっきりした記憶であるが，信州大学の桜井先生のリクエストで，本川に生えているヤナギ類も短時間観察した．

途中，昼食は宍道湖北西岸（平田市）の「翠苑」という中華料理店でとった．何を食べたかは覚えていないが，冷たいお茶を何杯もおかわりしたのを思い出す．この店は，宍道湖を一望できるという絶好の場所にあることも手伝って，今でも繁盛している．残念なことに，円木池の周辺は，当時は水田とスギ林という牧歌的な風景の中にあったが，数年前に「松江フォーゲルパーク」という花と鳥の大型施設の建設が始まり（2001年７月に開園），池自体は埋め立てられなかったものの，池の周りの田んぼは市に買い取られ，一部は駐車場となってしまった（このフォーゲルパークは，

残暑御見舞申し上げます。



水草研究会第11回全国集会

（1989年７月29・30日　松江にて）

来年、新潟でお会いできるのを楽しみにしています。

〒690 松江市西川津町1060
島根大学理学部生物学教室
国　井　秀　伸
TEL (0852)21-7100 内線 583

「オウム病」で一躍有名になったので，ご記憶の方も多いのではないかと思われる)．スチロール箱にクラッシュアイスを詰め，冷たくしてあった缶ジュースは，午後の暑い時間帯となった忌部の駐車場でみんなの喉を潤した．

記憶を辿ってみると，集会に関して一番印象に残っていたのは，現地見学会の日の暑さのことであった．水草研究会の全国集会は夏に行われるので暑いのは当たり前のような気がするが，私にとって暑さが記憶として残っているのは，何故かこの松江での見学会である．あの梅雨明けの空の青さと暑さの記憶は，これからも薄れることは無いであろう．最近は，汽水域を研究の主な対象としているために，ため池を訪れる機会はめっきり減ってしまったが，またいつかゴムボートを池に浮かべ，水草の調査をしたいものである．

第13回全国集会（神戸）をふりかえって

角 野 康 郎（神戸大学）

神戸での全国集会は第13回（1991年）にあたる．神戸には事務局がありながら当時会員数は2，3名であった．準備は会員の碓井信久先生と私のふたりで分担し，当日の受付は私の妻と学生ひとりに頼んでスタッフ計4名という家族的運営であった．会場はＪＲの駅から至近の舞子ビラを確保できたので北は青森県，南は佐賀県にいたる計57名の参加者の皆さんも遅れずに集合でき，年々増加して時間のやりくりを気にしていた11題の研究発表も無事終えることができた．裏方をやっていると時間の進行や設備のトラブルのことなどが気になって，研究発表をゆっくり聞く時間もないのが常だが，当時は今から思えばまだゆったりした雰囲気があったのだろうか，ときどき受付の様子をのぞきながら皆さんの話を聞くことができた．

夜の懇親会は，仲居さんつきの宴会となった．ここでの税金とサービス料を計算に入れていなかったために，実は今まで23回の全国集会で唯一赤字を出すことになった．この点で会にはご迷惑をおかけした．このことが妙に失敗談として記憶に残っている．おまけに二次会では飲み過ぎたなー．

翌日は天候に恵まれエクスカーションに出発である．播磨地方の水草を堪能してもらおうと碓井先生が計画を立ててくれたコースである．まずは明石市のオニバスの群生地．ここは今でも全国最大規模のオニバス群落であるが，実はこの年の調子はそれほどよくはなく，池の1／3ほどしかオニバスが生えていなかった．しかしこんな大群落を見るのは初めてという方も多く，喜んでもらえたのはさい先のよい出だしであった．

午後から企画した比較的小さな池をめぐるコースも好評だった．バスから歩いてオリエンテーリング風に，事前に配布した地図を頼りに自由に歩いていただいた．ジュンサイやヒメコウホネなど静かなたたずまいの中で観察してもらえたと思う．最後の吉川町の見学地は，小さな，それこそ畳6畳ほどの池が散在する場所であった．水草だけでなくトンボの種類も多く，時間をかけて回ればたいへん興味深い場所なのだが，限られた時間でどれだけ見てもらえるか不安であった．しかし，ここがいちばん面白かったという話を何人かの人から聞いた．やはり他に類のない興味深い場所だったのだろう．しかし，今やこの地区のすばらしい自然も半分ほどが開発によって大きく変化しつつあることは残念なことである．

無事に責任を果たせて当日の夜のビールはうま